

韓国ドラマ『未知のソウル』を偶然 Netflix で視聴した！

韓国ドラマ『未知のソウル』を偶然 Netflix で視聴した。双子の姉妹ミレとミジの物語であり、学生時代のひきこもりや、職場での正義感ゆえに孤立していく苦悩といった、現代的な課題が描かれている。

二人が互いの人生を引き受けるように生きる展開を通して、個人の問題として語られがちな生きづらさが、実は関係性の中で生まれ、揺らいでいくものであることに気づかされる作品であると感じた。

『未知のソウル』が示しているのは、ひきこもりや社会的孤立を「個人の弱さ」としてではなく、「関係の断絶が生み出す状態」として捉え直す視点である。

ユ・ミジがひきこもりの状態から一歩を踏み出すことができた背景には、無理に外へ引き出す働きかけではなく、自分の内側にある不安や傷つきを否定せずに受け止めてくれる関係の存在があった。

とりわけ祖母は、ミジを「変えようとする人」ではなく、「変わるかどうかに関わらず、そばに居続ける人」として描かれている。だからこそミジは、「きちんとした自分になれば愛される」のではなく、「今のままだも受け入れられている」という感覚を、かろうじて手放さずにいられたのだろう。

この「今のままでよい」という肯定があったからこそ、ミジは「外に出なければならぬから出る」のではなく、「自分のペースで、出てみようと思える瞬間」を待つことができた。

寄り添いながら共に時間を過ごす関係は、「社会に戻るための準備段階」としての安心できる居場所を形づくっている。そこでは、何かができるかどうかではなく、「そのままで存在してよい」という感覚こそが、回復の起点となっていた。

一方で、ミレの職場での変化は、孤立の中にある人が再び社会とつながり直ししていく、もう一つの道筋を示している。

窓際に追いやられた状況は、能力の問題というよりも、関係性の歪みや評価の固定化によって生まれていた。しかしホスのように、個人の背景や痛みにも目を向けながらも、社会の中での役割や可能性を言葉として差し出す存在が関わることで、ミレは自らの立ち位置を見つめ直し、主体的に関わり直す契機を得ていく。

ミレは、内部告発という過去の選択とその後の扱いによって、「あのときの自分は間違っていたのではないか」と自分を責め続けている。ホスは、その選択をともに振り返りながら、「あのときの自分もまた精一杯だった」「弱さを含めて否定しなくてよい」という視点を差し出す。過去のミレと現在のミレを、無理に切り離すのではなく、やわらかく結び直していく存在である。言い換えればホスは、ミレが自分自身に向けるまなざしを、少しずつ優しくしていくための「鏡」のような役割を担っている。

これら二つの流れは、ひきこもり支援において対立するものではなく、むしろ両輪として捉える必要がある。「安心して立ち止まれる関係」と「社会へとつながり直す関係」の双方があってはじめて、人は自らのタイミングで一步を踏み出すことができる。

本作は、支援とは何かを問い直し、個人を変えることではなく、関係の質を編み直していくことこそが回復の本質であることを、静かに示している。